



【トークバトル】

# 「地域の自立とはなにか!」

東谷 望史氏 (高知県馬路村)

横石 知二氏 (徳島県上勝町)

若松 進一氏 (愛媛県双海町)

森本 純一氏 (愛媛県内子町)

## 成功の鍵は 仕組みづくり

**森本** ミニトークで、みなさんは「地域づくりは、人を動かすシステムづくりが不可欠」と話されたように思います。ここから第二部を始めたいと思います。

**横石** 高齢者はデーサービスに行くより、仕事をしたい。おばあちゃんの出番があるから、家族の中でも尊敬され、家族関係もうまくいく。することがあるから、朝起きて腰がしゃんと伸びる。いろいろのシステムとは、高齢者に出番を作るシステムです。

**東谷** システム変更は大変です。農協では休みを変えるだけでもおおごとでした。馬路村では子や孫が高知市や安芸市に住んでいる人が多いので、収穫を手伝いに帰って来やすいように日曜集荷、水曜休みにしましたが好評です。昨年からは集荷が始まると終わるまでは無休にした。ユズを搾

る効率が良くなっただけでなく、品質も向上したように思います。また、「ゆずの森」が稼働したら交代で日曜祝日も来客者のために開店します。お客さんのニーズに合わせてのは当然と思うけど、グジグジ言ってきた職員もいる。でも、やります。

**若松** 私が取り組んだのは町づくりに燃える人をつくる仕組みづくり。人を育てるには感動させること



です。小さい町から遠くの大きな世界に出かけたなら感動するだろうと、費用は全額出す、レポートもいらんから海外に行つてこいと若者たち呼びかけた。二百万円の予算で、二人の青年をアメリカに派遣しました。ところが、感動したんでしょね。レポートを書いてきたので、冊子にして千部刷つてやったら、町中に配つてアメリカのことを話し始めた。大成功と思いました。二十年間続けました。それが私の仕組みづくりです。ところが今、借金コンクリートの地域づくりをする町はあつても、若者を育てることに金をかける町は少なくなつた。

「夕日のまちづくり」も当時の大人から見ると非常識なものだったかもしれないが、今では常識になりました。非常識も成功したら常識です。馬路のユズも、上勝の葉っぱも、始めたころは、非常識だったんです。言い換えると、みんなウソつき。ウソを物語りにしていく過程が情報戦略です。情報戦略が小さな町の小さな非常識を世界のオンラインワに育てた。うちの夕日のほうが、

葉っぱやユズより、ましなウソをついています。

**横石** うそつきではないよね。(笑)

情報と言えば、情報を共有化するための仕組みも大切だと感じています。この仕組みが上勝にはあるから、町に一体感があり、住民がひとつになれるのではないのでしょうか。

私がここで話をしていることは、上勝のおばあちゃんたちはみんな知っています。来る前にいろいろのパソコンに「愛媛でこんな会に参加します。報告を楽しみにしてね」と入力してきました。おばあちゃんたちは自宅にある高齢者用パソコンで、私が愛媛へ行って、何をしているか知っていますから、私が留守でも安心して葉っぱを集めています。馬路村はデザインと演出がものすごくうまいですね。うらやましい。喉から手が出るほど欲しいのに、上勝に思いを寄せるデザイナーと出会えていないんです。

**東谷** 横石さん、それはちょっと違う。馬路は優れたデザイナーを連れてきたわけではありません。村を本当に知る優秀なデザイナーを育て



東谷望史氏

たんです。デザイナーも、私たちと一緒に仕事をしながら成長した。初めからいい人に出会ったわけではない。

**横石** わかりました、頑張つて育てます。もうひとつ、とても大切だと思うのは競争と評価の仕組みです。いろいろのおばあちゃんたちが、パソコンに向かうと、はじめに画面に出てくるのは、葉っぱの今月の出荷額と、それが参加している人の中では何番目かという自分の順位です。これを見るのが面白くて仕方がない。この順位にすぐこだわります。「あの人だけには負けたくない」「あと〇〇円売れば順位があがるはずだ」とね。闘争心を燃やしている。モチベーションを上げるには仲よ

しクラブではダメです。互いに競争してこそ、レベルはあがります。農村にありがちな「まあええわ」「このぐらいでええわ」では、レベルが上がリません。

### 教育がまちを変える

**若松** コップを磨くには、内磨きと外磨きがあります。中を磨くのは自分たちで出来ますが、まちづくりは外のゴミをどう取るかが課題です。つまり、外の人に気づかせてもらうんです。「あんたの町汚いよ」と言われて、初めて自分の町の汚なさに気がつく。夕日も「きれいだよ」と言われて気がつきました。全国の素晴らしいまちづくりをしている所は、この部分が教育としてやられています。それは無意識の中の意識で、結局は教育の力です。

**横石** 上勝のおばあちゃんたちは六十歳よりも八十歳になつてのほうが感性が豊かです。感性が磨かれている。情報の渦が、自分の周りに巻いてくるようになると感性が磨かれます。鳴門の渦が巻くように、



自分にいろいろな情報が入り、出会いがあつてこそ磨かれますね。いつも日常の繰り返しだけで終わつていと磨かれませんか。店主は自分で商売をしています。それなのに夕方になつて、ビール飲みながら、「今日も商売あかんかったな」ではいけません。

**東谷** 私も感性や直感は大切だと思ふ。いかに早く頭の中で整理をして、自分に必要な情報を自分のものにするかです。これは日頃から問題意識を持つてないとできない。さらに価値観は常に変化をしています。今は同じ感性では十年通用しない。これを考えておくことも重要です。

### 地域づくりの到達点

**若松** 三人にお聞きしたいのですが、どこまで到達したいのですか。馬路村は三十億円の売り上げまでいったが、屏風は大きい方が倒れやすい。地域づくりに天井はあるのですか。

**東谷** 私にもわかりません。三十億は通過点です。五十億はそう遠くは

ないと思います。中山間地で手を組むことも大切と思ひ、窪川町と組んで馬路スタイルのユズづくりも始めてもらいましたが、お客さんの望むものは、馬路村のユズからできた商品ということもわかっています。しかしながら、土地のない村だから仲間を持つことも理解してほしい。それとあわせて、かつて田畑に杉を植えました。今度は杉を切り、ユズを植えます。しかも、ユズだけでなく広葉樹や雑木などをうまく配置して、新しいタイプのユズ園をつくりたいと思つています。工場ではなく、このユズ園を見に人が来るようにしたい。生産・加工・販売、そして観光とすべての仕組みができあがります。



森本純一氏

## 合併が地域に もたらすもの

**横石** 葉っぱは他からは買いません。いろどりは販売価格の5%を手数料として受け取っていますから、百五十円で他から仕入れて三百円で売れば儲けはそちらが大きい。でも、第三セクターは地域のために存在しているのですから、そんなことはできません。住民のためという理念は壊したくないと思うからです。最終目標は、町で後継者を育てつつ二千人の町を維持して行くことです。そのためには攻め続けなければいけない。地域に住んでよかつたという存在感、家族と一緒に何かができる喜びを大切にしたい。これができるような地域産業にした

い。

**森本** 何にでも適正規模があると思う。販売額を大きくするために規模をむやみに大きくしていったら無理が生じると思う。販売額を大きくしたいのなら、適正規模のものを一つ、二つ、三つと増やしていく方がいいと思います。

**若松** 今、地域の自立の前には、行政の大合併という現実があります。合併は地域にとつて大問題です。国鉄やN.T.T.を見てもわかるように、分社化が時代の流れなのに逆行していないでしょうか。金がないからと住民へ負担を押しつけ、小さな自治体が大きくなり、その大きな自治体の中では中央集権が進んでいく。これは自立とは違います。上勝や馬路はそんな流れをいかくぐつて合併はしていませんね。

**横石** 今すぐ合併はすべきでないというのが、議会や住民のほとんどの意見です。大きくなると自分の出番が少なくなり、自分の存在感が希薄になり、人の「気」が切れてしまふ。例えば、合併すれば学校統合が進みますが、地域から学校がなくなること、地域の人にとつてどれだけの「気」が切れるか。そうなるとうんざりして働いていたおじいちゃん、おばあちゃんも、送り迎え付きのデューサービスのお世話になる。悪い



若松進一氏

歯車が回りだします。四国でも、五年後、十年後には町が荒れ、村がなくなると思います。格差は拡大し続け、消滅は進行していくでしょう。そうなるとうんざりして働いていたおじいちゃん、おばあちゃんも、送り迎え付きのデューサービスのお世話になる。悪い

**東谷** 行政の合併が進みましたが、大きくなることだけがいいことではないと思います。また小さいことが要求される時代が来る気がしません。これから「村」に間違いなく価値が出てきます。今、私たちは「ゆずの森」加工場の周辺に雑木を植えています。お客さんには少し離れた駐車場に車を駐めてもらい、雑木林





横石知二氏

## 価値観と場を 組み立てる

の木陰を歩いて玄関まで来てもらおうと思っています。公共事業で整備した公園は、どれもパツとしませんね。感動するものがない。北海道のニングルテラスも黒川温泉のまちづくりも、いずれも公共事業に頼らずに手づくりでやってきたから味があるんじゃないでしょうか。

横石 テレビに出ると「うちの裏山の葉っぱを売ってくれ」と電話がかかってくる。いろいろは、葉っぱを売っているのではないんです。葉っぱが売れる場面を作って売っているのです。愛媛で講演などする

と「ミカンが売れない」という愚痴をよく聞きますが、私は「ミカンが売れる場面づくりをなさっていない」と聞き返します。例えば、会議でペットボトルのお茶が出て、ミカンが配られることはないですよ。

果汁で手が濡れ、資料は汚れるし、剥いた皮は捨てるのができず机の上。でも水分に強い袋に手を拭く濡れテッシュと共にミカンが入っていつていたらどうでしょう。食べた後にテッシュで手を拭いて、テッシュと皮は袋に入れて、会議終了後はゴミ箱にポンと捨てて帰る。そんな場面を作ったらどうでしょうか。場を売ることがポイントだと思います。

若松 六十五歳以上の高齢化率が五十%を超えると集落は機能を維持できないと言います。森本さん、



限界集落の最前線はいかがですか。森本 海抜四百二十メートルにある約四十人の集落で暮らしています。プライドとして、誰にも気づかれずお年寄りが死んでいたということだけはないうにしたい。だから、水戸黄門の間に、灯りが消えていたら注意します。道の草を刈るなど生活環境の整備は後継者がいないとできません。地域が自立するということは、仕事をさちんとすれば家族と暮らしているだけの経済的基盤が維持できるということなんです。私も出来る限り、山に張りついて生きていきます。

清水 すごいバトルでした。若松さんのハーモニカで仲良く閉じたいと思います。本日はありがとうございました。